

しかし、現実にはAIDで生まれている子どもたちはすでに色々な年齢に達しています。それに今までは告知しないことが奨励されていたのですから、これから生まれてくる子どもには幼少時からということも可能ですが、ほとんどの子どもにはその時期が過ぎていることでしょう。

..... 思春期というハードル .....

可能であれば、親子関係が最も難しい思春期に告知することは避けたいと思うのです。しかし、この時期は社会の色々なことに子どもが不信や疑問をもつ時期であり、子ども自身が自分の家族内に何か秘密らしきものがあることに気づく可能性が高い時期でもあります。子どもの成長と共にその子どもがもっている遺伝的な個性が際立ってきますから、見た目似ているかどうかという問題だけではなく、感じ方や考え方、もっている能力や興味が、特に遺伝的つながりのない親のそれとの違いが明確になってくることでしょう。そしてそれに気づいた子どもがとても悩んでいる場合もあります。だから最も知ることが必要な時期とも言えるのです。ただ、思春期の子どもは、脳内の細胞の発達もすさまじく、身体上の発達や変化が大きくて、それにエネルギーが費やされ、肉体的にも精神的にも不安定な時期ですから、知りえた事実を受けとめ整理するという処理能力が伴わない場合が多いのです。

しかし、養子よりも告知の年齢を高く考慮するのは、不妊という状態やそのための治療について説明するためには、性交や妊娠についてある程度の理解ができないと告知が難しいのではないかと、一般に思われているからです。そうすると、中学生か高校生以上ということになってしまいます。

特に、日本では性教育が遅れています。一般の家庭内でも性的なことを話題にすることを極端に嫌がる親が多いように思います。学校でさえ、この10年間に随分性教育が後退してしまいました。このことについては、後に説明することにしましょう。とにかく大事なことは、「あなた自身が性にまつわることを話すのに、汚らしいとかきまりが悪いとか恥ずかしいと思っていると、子どももそう思ってしまいます。また、あなたが精子や卵子の提供を受けた治療について話すときに、不安で、できることなら隠したいという気持ちでいると、子どもはそんな方法で生まれてきたことが何か悪いことのように受けとめてしまうことになります。あなたの子どもとあなたの子どもを妊娠した方法に、愛情と誇りをもっていることが重要なのです。」

思春期に話すしかない場合には、それなりの配慮と工夫をしながら、正しい知識と事実をきっぱりと誠実に話すしかないのです。話すタイミングを良く見計らって、話すときの雰囲気心配りをし、話した後のフォローにしっかりと時間をもつことが大切です。

..... すでに成人になっている場合でも .....

告知の難しさは子どもが成人している場合でも同じです。大人になっていけば理解が進み、了解できるかと期待しがちですが、実際は年齢が大きくなるほど、混乱と怒りが大きくなるのです。F子さんはこう語っています。

「私は、自分がAIDで生まれたことを、結婚も出産も経験したあとの30代に母から聞かされました。いままで「自分」だと認識して生きてきた「自分」と、本当の「自分」をすり合わせることも簡単ではありませんが、それ以上に、大好きな母に対して“大切な事を長い間教えてくれなかったことへの怒り”を覚えることがつらくてしかたがありませんでした。できれば、小さいころから話してほしかったと思います。(中略)

AIDを選ばれるご夫婦が「子どもには真実を隠す幸せを選ぶ」と言うのを聞くことがあります。けれども、絶対に隠し通せるとはかぎりませんし、もしも子どもが真実を知るときには、親以外の誰かから聞くことは避けるべきだと思います。そして、私がそうだったように、その時期が遅くなるほど子どもはよりいっそうつらさを味わうのではないかと思います。

AIDで生まれた人が、どういう思いを抱えるかということは、今までに前例のないことです。親も、本人も手探りで歩く道です。そのつらさは本人以外の想像を大きく超えるものになるでしょう。AIDを選んでまで得た家族なのですからご夫婦の選択に自信をもち、子どもの生きる力を信じて小さいころから真実を話してあげてください。」\*

しかし、思春期であれ、すでに成人になってからであれ、あるいは仕方なく告知せざるを得ない状況があったにしろ、告知をされた子どもたちは、「告知をされて良かった」と、話しています。

## 5. 年齢別告知の仕方と事例

では、あらためて年齢に応じてどういう告知の仕方ができるのかについて、外国の事例も参考にしながら考えてみましょう。

..... 乳児期(0~1歳) .....

赤ちゃんが無事に生まれてくれたときの感動が、いつまでも続くものではありません。生まれたばかりの赤ちゃんの世話をすることは、新米のお母さんにとってはとても大変な

\* 冊子「Male Infertility」AIDで生まれた人からのメッセージ「小さいころから真実を」より引用  
冊子巻末の資料-4を参照



ことです。赤ちゃんの泣き声から赤ちゃんの要求を推測してそれに応えるという試行錯誤を繰り返しながら、少しずつ赤ちゃんのニーズを的確に認識し、それに応えられるようになって、親としての自信が増し、密接な交流ができるようになるものです。そうしてだんだんと可愛らしさやいとおしさが増してくるものです。

「赤ちゃんは、親がだんだん上手になって、特別な赤ちゃん言葉で語りかけてくれるのを聞きながら、親の顔を見つめ、まねることが好きです。あなたが子どもをお風呂に入れたり、寝ている子どもに頬ずりをしたりしているそんなときが、どんなにあなたを愛しているのか、あなたが生まれてくれたからこそ家族を作れたということ話し始めるのにふさわしいのです。こんなに密接なひととき — 多分お乳を飲ませていたり、眠りに就く前の子どもを抱きしめていたりする — だからこそ、あなたがどんなに親になりたかったのか、あなたの命をもたらしてくれたドナーの心の広さによってこの機会が与えられたことをどんなに幸運に思っているか、あなたをどれほどいとおしく、どれほど愛しているのかを、優しく語りかけるのです。

赤ちゃんはその言葉の意味を理解するわけではないのですが、こんなふうに語りかけられることやお喋りすることを楽しむことで、彼らの脳に親子関係が構築されていくのです。」

「Davids氏は、まだ病院にいるときから、赤ちゃんに出生のいきさつを語り始めました。彼は世話をすることに熱中し、父親と息子には、おたがいに強い絆ができました。息子が言葉を理解するようになると、父親は、息子が出生のいきさつについては覚えているようには思えませんでした。なによりもお父さんと一緒に何かをすることが、とても好きであることに驚きました。」

赤ちゃんのときから語りかけることは、このように言葉の意味を理解していなくても、親子関係を深めることになり、これからさきの告知の練習にもなります。

しかし、養子の場合には、こんな問題がでてきました。多くの養親は毎日子どもの世話をするうちに、その子を「我が子のように」というより、「我が子」として認識していきますから、産んでいないことなんて忘れてしまうのです。ですからこうして語りかけることは、「この子は、養子にもらった子どもなのだ、その都度確認しているようで、怪しくなるのよ…」と訴えてこられます。その気持ちも良くわかるのです。本当に日々親子という信頼を積み重ねているのですから、時には告知されている子どもでさえ、そのことを忘れて生活しているものです。でも、折にふれてさりげなく必要に応じて語られていることは、いざというときにうろたえずに済むのです。まして内容は「愛している」「可愛い」「私の子どもになってくれてありがとう」ということなのですから、出し惜しみしないでやってほしいのです。

..... 幼児期前期 (2~3歳) .....

この年齢は、まだまだ親の庇護が必要な時期なのですが、子どもの世界が広がり、親以外の人との出会いや新しい出来事に興味を示し始めます。親にとってみれば、ヨチヨチと動き回るだけでも心配でハラハラしてしまいます。言葉でも行動でもどんどん発達していきます。また、今までなら自分が好きでしていたことを「いや」と言ってみたり、できそうにないことなのに「自分でする」と言ってみたりきかなくなったりします。まだ自分の気持ちや身体を自分でコントロールできませんから、彼ら自身が欲求不満を感じてかんしゃくを起こしたりします。だからどうしても親も「駄目です!」と行動を制限してしまうことが増えてくるのです。

「ドナーからの提供で作られた家族においては、自分の子どもをととても愛しているAIDの典型的な父親は、子どもが欲しがるものを与えなかったら、子どもは自分を拒絶するのではないかと心配してしまうかもしれません。

これはすべての親にあてはまることであって、提供による治療を受けた親たちだけの問題ではありません。しかし、子どもたちは彼らの安全を守れる限界の中に保ってくれる人物を信頼するとき、子どもはたとえ怒りを爆発させていても、安全と愛情を感じています。子どもたちは、彼らの要求が親を圧倒して崩壊させたり、親が子どものフラストレーションに降参したりすると、安心感をもつことができません。このことをよく認識して、すべての父親と母親は、適正な制限枠を明確にし、幼児の要求と怒りの爆発を、毅然として、しかし忍耐と柔軟性をもって対処する必要があります。」

「もし、赤ちゃんのときからお話をしてきたのなら、子どもが行動的になり、もっと世界を広げ始めたときには、より豊かに話し続けてください。例えばあなたが車やバスに乗って旅行しているときに、かつてあなたが妊娠していたときに通ったクリニックや病院の前を通ったなら、消防自動車やクレーン車に興味をもたせるのと同じように、『あなたが生まれるのを助けてもらうために、ママが通っていた病院だよ』と、指差して興味をもたせることができます。

もし、あなたが次の治療のためにクリニックに通っているなら、あるいは友人が妊娠しているのなら、『赤ちゃんはお母さんのおなかの中で育つのよ。でも時々お母さんやお父さんには赤ちゃんを作るための助けが必要なことがあるんだよ』と、話してください。3歳以下の子どもなら、どんな助けが必要なのかという質問をしてくることはめったにありません。しかし、もしあったとしたら、次の年齢のところの記述や、「My Story」や「Our Story」\*の本から言葉を選んでください。」

こんなふうに、イギリスでは、子どもの成長と共に告知をしようと考えているようです。

\* 冊子巻末の資料-6・7を参照

3歳や次の4~6歳頃が最初に告知するには最も適した年齢だと思います。

特に、絵本を使うことができるようになります。絵本はとても理解しやすく、何度でも繰り返して読めるので、とても有効です。

..... 幼児期後期 (4~6歳) .....

この年齢になるとかなりのことを理解することができるようになりますし、語彙の量が飛躍的に増え、また幼稚園などの集団生活が始まり、交友関係も広がります。養子の場合では、3~4歳頃から「赤ちゃんはどこから来るの?」という質問が出てきていますし、周りのお友達のお母さんが大きなおなかをしていること、その中に赤ちゃんが育っていることや赤ちゃんが生まれたという情報を聞いてくるようになります。すると、興奮して必ず「私はどうだったの?」と聞きます。その時が一つの良いタイミングだと思うのです。

「My Story」は、AIDで生まれた子どものための絵本です。「Our Story」は、卵子の提供で生まれた子どものための絵本です。どちらもほとんど同じストーリーです。簡単に説明すると、「お父さんとお母さんはとても愛し合っていたので、かわいい赤ちゃんがほしいと思った。だけど赤ちゃんは生まれなかった。赤ちゃんはお父さんの精子とお母さんの卵子が会って、そしてお母さんのおなかの中で育つ。でもお父さんとお母さんは随分努力をしたけれど赤ちゃんがやってこなかったので、悲しくなってお医者さんに相談したところ、お医者さんが、親切的な男性(女性)から精子(卵子)を分けてくれた。そしてお母さんのおなかの中で、赤ちゃんが育ち、無事に生まれ、お父さんとお母さんはとても喜び、赤ちゃんは家族や友人に祝福されて、家族の一員としての生活が始まった」というお話です。やさしい英語で、可愛い絵が付いていて、最後に子どもの写真が貼れるようになっています。

どちらも2~3歳からでも楽しめるようにできていますが、「お父さんの精子とお母さんの卵子とで赤ちゃんができる」と説明しています。「Sometimes it takes three to make a baby」\*という本は、3歳~9歳までとしています。そこでは精子・卵子・卵巣・睾丸・子宮という言葉を使っています。

また、イギリスの本では、この年齢の告知の例として、次のような表現をあげています。

- 「あるお母さんには、赤ちゃんを作るのに十分な卵がありませんでした。それで、別の女性の卵を分けてもらうことが必要なのです。」
- 「お父さんの精子は、お母さんの卵に行き着くほどに早く泳ぐことができませんでした。それで、病院に行って、ある男性が私たちを助けるために精子を分けてくれることに同意してくれたのです。」

\* 冊子巻末の資料-8を参照

- 「ときには、お父さんには十分な精子がなく、お母さんには十分な卵子がなかったので、赤ちゃんを産むためには、別の男性と別の女性からの助けを必要としたのです。」

さてさて、日本ではここまで簡潔明瞭に表現することが、この年齢の子どもに対してできる親がどれくらいおられるだろうかと、考えさせられます。だからといって、中途半端な表現では、子どもにもっと不可解な、良くないイメージをもたせてしまうことになるでしょう。こういう表現を使うのなら、もっと年齢がいつからでないと告知はできないと考える人が多くおられるかもしれません。しかし、性の知識については成長とともに個人差が出てきます。かえってこのくらいの年齢では、まださほど差がないので、どの子どもにもしっかりと説明できて良いのかもしれない。

「すまいる」の勉強会で、一度ロールプレイをしたことがあります。4歳ぐらいの子どもに告知するという場面でしたが、Gさん夫婦にお願いしたときに、Gさんは「赤ちゃんができるためには、お母さんの卵にお父さんが魔法をかけるんだよ。だけどお父さんの魔法の力が弱かったので、親切な人がその人の強い魔法の力を貸してくれたんだ。それであなたが生まれたんだよ」と表現しました。その場にいた人はみんな思わず拍手してしまいました。どの人も、子どもには理解しやすいなかなかステキな表現だと思いました。「あなたいつこんなことを思いついたの？」とG夫人もびっくりして訊かれたほどでした。Gさんは「立って前まで歩いていく間に、ふと思いついたんだ…」と答えていました。しかし、Gさんは後になって「本当にこの表現でよかったのだろうか？ 皆さんは褒めてくれたけれど、これが良い表現かどうか判らないと思う。もっと考えてみることにする」と言われたそうです。ロールプレイをすることはこうして考えるきっかけになるので、とても良いことだと思いますし、もっと子どもに理解しやすい言葉やストーリーをそれぞれの人が考えないといけないのだと思います。

日本では、小学校の4年生になると、思春期における男女の身体の相違という課題で、それぞれにどういう身体の変化が起きるのかについて保健の科目の中で学ぶようです。そこで卵子とか精子という言葉や性器の名称が教えられます。その教科書\*の卵子の説明に「赤ちゃんのもとになるもの」という表現が使われています。特に幼児の場合で、どうしても精子や卵子という表現を使いたくない場合には、「お父さんの身体の中にある赤ちゃんのもとと、お母さんの身体の中にある赤ちゃんのもととが会って、いのちになり、お母さんのおなかの中で赤ちゃんとして育っていく」という説明ではどうでしょうか。

また、養子の場合でもそうですが、3~4歳の子どもの場合には告知された内容を意外にしっかりと理解しているし、素直に受け入れて、あまり混乱もせず、すぐにいつもの生活に溶け込んでくれるので、告知した親の方が「あれだけ悩んですごい決断をして、清水の舞

\* 「新しいほけん 一人間ってふしぎだな」 小学校3~4年用 東京書籍 平成14年発行

台から飛び下りるような気持ちで話したのに、その甲斐がないと思うぐらいにあっけらかんとしてくれている」と驚くほどなのですが、5歳を過ぎてくると、時に泣いて「お母ちゃんのおなかから生まれたかった!」と訴えたりします。そこで「お母ちゃんのおなかから生まれたことにしようか」などと言うとすごく嬉しそうな顔をします。そうではないと分かっているからこそ、親子であるというより強い確認として「お腹から生まれたかった」という表現になるのだと思います。そこで「出産ごっこ」のような遊びを繰り返し、繰り返ししてやると、納得してそれがまた親と子の絆を深めているようです。AID児の場合も、告知のあとで、何度も質問したり、同じ話を何度も聞きたがったりするかもしれません。

..... 小学校低学年(7~9歳) .....

学校という集団での生活が始まります。この年齢までが告知に適した年齢なのですが、そろそろ人とは違っているということにも理解が及んできます。理解力も一段と進みますから、それだけに準備もより整えておいてください。それでも日本の子どもは外国の子どもと比較すると、前述したように性教育が遅れている分幼い感じがします。絵本などがまだまだ有効な時期です。

この年齢の子どもは、一番安定して育っている時期かもしれません。まだ親にも充分依存しており、言うことをよく聞いてくれますし、甘えてくれます。家族との外出や、地域での行事にも積極的に参加してくれます。学校生活も特別のことがなければ楽しんでおり、同年齢の子どもと行動を共にすることを喜びます。

小さい頃から告知されてきた子どもは、その意味を一層理解することができますし、前項で述べたように、学校での性教育によって新しい知識を得て、もう少し具体的に考えることができるようになる時期でもあります。そのために突然質問してくることがあるかもしれません。

「DCネットワークのある父親が、どうやって精子が提供されたのかという息子の問いに率直に答えようと思いました。」

8歳の息子が突然「お父さん、どうやって精子を提供するの」と訊いてきたのです。私は、これは当然の質問だと考え、彼に説明しました。金曜の夜、近所のフィッシュ&チップスの店に車を走らせていたときのことです。「ええ!」と息子は言いました。この奇妙な大人の男性の行為は、通常は個人的な楽しみに関連しているのだと、息子に説明するのは大変でしたが、一所懸命に説明しようと思いました。」

こんなふうに日本のお父さんも話せると良いですが…。

「この時期に初めて告知しようとしているなら、前述した、十分な準備と、告知をすると

きや場面、告知の内容などが役に立つでしょう。思春期が始まる前に告知することは、初めてのショックや驚きを比較的簡単に乗り越えられることを意味しています。繰り返しますが、あなたの自信と安心感と、子どもが必要なときにはいつでも喜んで話したいという親の気持ちがあれば、あなたの子どももあなたと同じように感じるができるでしょう。」

また、子どもに告知しようと思っていること、あるいは告知したことを、親族や親しい友人に伝えておくことも大事なのですが、話す相手をどこまでに限定するかも、難しい問題です。当然に誰にでもオープンにすることではありません。

この年齢あるいはもう少し小さい5歳ぐらいでは、さほど考えもなく、養子であることや提供による治療で生まれたこと、あるいは親から話された特別に望まれ愛されている子どもであるということを、友達に話してしまうことがあるかもしれません。その心配が、「もう少し大きくなるまでは告知をしたくない」と思う理由の一つでもあります。しかし、告知をやめることにはつながりません。だからといって、「子どもに家族の中では話しても良いけど、家の外では秘密にしておくことを要求するのは、子どもを混乱させることになります。」

あるアスペルガー障害についての講演で、「子どもには自分の特有の症状についてよく理解させておく必要があるが、それを誰彼なしに話すのではなく、自分を理解してもらうためにそのことを話す必要のある人や、話すことで自分に利益となる場合にだけ話すことが大事なだけけれど、それが誰で、どんな場合か分からないときには、親や先生に相談しなさいと、子どもにアドバイスしてやると良い」\*ということを知りました。これは養子にも提供による生殖補助医療で生まれた子どもの場合にも、的確なアドバイスではないかと思えます。

しかし、社会の理解を深めるためには、必要なときにはしっかりオープンにすることともとても大事なことだと思います。養親たちには、いつも「さりげなく、しかし堂々としていきましょう」と話しています。

#### ..... 小学校高学年(10~12歳) .....

いよいよ思春期前期に入ります。女の子の多くが初潮を迎えますし、男の子の中にも精通を経験する子どもも出てくるでしょう。身体的にも知的にも、女の子の方が成長が上回る時期です。子どもの気質や性格もはっきりしてきますし、親と似ているとか、似ていないという関心も強くなります。明らかに外見上の違いが今まで以上にはっきりしてきます。

すでに告知している場合でも、そういうことから質問が増えるかもしれないですし、だからかえって何も言わなくなる可能性もあります。

\*「うちあける-真実告知事例集」社団法人家庭養護促進協会大阪事務所発行 2004年改訂より引用  
冊子巻末の資料-5を参照



「この年齢になると自意識が芽生えてきて、家の外では自分が友達と違うと感じるようなことを、家庭内ではセックスに関する話を話したがりなくなります。男の子の場合、10歳前後には“違う”ということにとっても敏感になります。女の子は時に違うということを誇示したがり、精子・卵子・胚の提供を“特別なこと”だと大変ポジティブに捉えることがあります。

子どもの性格や気質や、精子・卵子・胚提供のことが家庭内でどのように扱われてきたかによるところが非常に大きいのですが、そのことが大変興味を引くトピックになることがあります。

子どもは提供によって生まれた他の子どもとコンタクトが取れることを、期待しているかもしれません（女の子にその傾向あり）し、何の興味もないように見せることもあるかもしれません（男の子にその傾向あり）。この両極端のどちらであっても、あるいはその範囲内にあることも、極めてノーマルなことです。」

この時期に、初めての告知をするのであれば、十分な準備が必要になります。しかし、思春期前に済ませられるという意味では、はずしたくない時期ではあります。なぜ今告知しようと思うのかを、短くしっかり伝えられれば良いと思います。特に、身体に変化が現れてきますから、家庭でも性にまつわる会話が増えてきますし、親としては学校だけに任せず、家庭でも正しい性教育が必要になる時期です。こういう面でも日本は外国より遅れているように思いますが、親も勉強して、自分の子どもの発達に応じた説明をすることが必要です。そういう意味では、告知するきっかけがつかみ易い時でもあるのです。まだ絵本も有効に使えます。

イギリスの本に、告知するきっかけをずっと捜していた夫妻が11歳の息子ジャックにAIDとしての彼の始まりを告知する場面が出ています。

「ある夜、3人で居間に座っていました。母親がジャックに『My Story』の本を見せました。「私達があなたを産むために受けた治療についてわかってもらう助けになるのではないかと買って買った本なの」と説明しました。ジャックは両親と一緒に本を読みました。彼は満足したように見え、何の質問もしませんでした。

夫人は後に「私達は“告知”のプロセスは複雑にちがいないと予測していたのですが、それまでの数年間の心配は必要なかったのです」というコメントをしています。

夫妻は、ジャックが質問してこなかったのが、彼がどれぐらい理解しているのかわかりませんでした。それで、家族でDCネットワークの会合に参加する前に、息子に自分の命の始まりについてどのように理解しているか、それをどのように説明するのかを訊きました。ジャックは大変簡潔に、そして完全に理解していることを説明することができました。会

合から帰宅し、父親が『おやすみ』と言ったときに、ジャックは急に『僕の大事なお父さんでいてくれてありがとう。とても愛しているよ』と言ったそうです。』

これぐらいの年齢の子どもが読むのに適当だと思う「Let Me Explain」\*という本があります。7～10歳用になっていて、絵もかわいくてあたたかな雰囲気の本ですが、割合文字が多いので、10歳ぐらいの子どもにとっても良いアメリカの本です。

物語は、8～9歳ぐらいのおてんば女の子がAIDで生まれたことについて、父親から説明されたことを、質問の形にして、お友達に自分で説明するというスタイルで書かれています。

まずとても感動するのは、生まれる前から今までパパが私に何をしてくれたのかが詳しく語られていることです。おっちょこちょいで、ユーモアがあって、子ども好きで、子ども想いのお父さんの姿がいきいきと語られています。そして、遺伝とAIDのことについて説明をしてもらっているのですが、面白いのは、次のような会話です。

「パパの精子はどこが悪かったの？」

「君の自転車のチェーンが外れた去年の夏のことを憶えているかい？」

「うん、憶えているけど、それがパパの精子と関係があるのかな…？ 私の自転車のチェーンが外れてしまった。パパと私ではめようとしたけどうまくいかなかった。修理屋さんに持っていったけれど、修理屋さんもやっぱりうまくいかなかった。それにどうしてそうなったのかも分からなかった。だから新しいチェーンを買わないといけなかった」

「それと同じなんだ。ただ精子はチェーンを買うようにお店に行くことではないんだけど…」

精子と自転車のチェーンとを一緒にするのか！？とびっくりしましたが、その受けとめ方の軽さというか、深刻でないところがとても良いのではないかと思います。最後は「結局のところこういうことじゃないかな。精子が誰から来たとしても、いったんステキな赤ちゃんが育ち始めたら（それは私よ！わかっているよね）、そこにはたった一人のパパしかいないの！」と結んでいます。

この年齢以上になって告知をするということは、その子どもとそれまでの年月をどれだけ“親子してきたか”という経過があるからこそ、できることなのだと思います。

..... 中学生から高校生 .....

いわゆる思春期から青年期にいたるこの時期は、まず身体が大きく変化します。そしてそれにともないホルモンシステムに複雑な変化がおきています。また「思春期は第二の脳

\* 冊子巻末の資料-9を参照

の形成期とされています。脳の爆発的な発達によるいらいらした感情から、情緒の不安定や「大人に対する反抗」が現れ、親が頭を抱える時期です。(中略)

一番発達を遂げるのが、脳の司令塔である前頭葉です。前頭葉は過去の記憶と新しい経験を比較して、考えたり、判断したり、決断したり、実行を命令するところです。因果関係がわかり、長期の計画を立て、感情を抑え、行動をコントロールできるのも、前頭葉が十分発達して、大人の脳になってからです。どこから見ても大人だと思える高校生が、首を傾げたくなるような愚かな行為を犯すのは、前頭葉がまだ発達途上なので、知覚情報の統合や感情や行動のコントロールができないからです。」\*

子ども自身でさえ、自分の心身の変化に振り回されているものですから、いつも苛立っています。しかし、そのことをうまく親に伝えることができません。親からすると、つい最近までのあの可愛かった子どもの姿がどんどん失われていくことにあせります。今まであたりまえだった親子の会話がギクシャクし、親にとっては子どもが何を考えているのか分からなくなり、親が子どもの行動について逐一介入してしまいやすくなります。そうすると、子どもから怒りの攻撃を受けることになります。自分をとりまく権威や価値観に疑問が生まれ、親への反抗ばかりではなく、社会規範を逸脱する行動にでる子どももいます。そうして親子関係が危機にさらされやすい時期になるのです。

すでに告知を受けている子どもも、あからさまにそのことをもち出して、親への攻撃にすることがあります。「本当の親ではないけれど！」と、養子たちも言いますからAID児たちも言うかもしれません。叱られたときや、自分の要求が聞き入れられなかったときに、よく言います。そういう時期だと理解していても、親たちは苦痛を感じ、落ち込んでしまいます。しかし、多くの場合、あまり気にすることではありません。確かに、今までの年齢とは違い、自分のルーツに対しても関心が高まっていますし、「自分は誰」というテーマの中心は、「ドナーから受け継いだ遺伝子は自分は何をもたらしているのだろうか?というものです。そして子どもたちは成長するにつれ、急速に変わっていく外見にますます関心をもつようになり、変化の兆しに注目するようになります。身体的類似が、アイデンティティに関する子どもたちの疑問の中心になるかもしれません。」

育て親が自分にとっての親だと思っていますし、どっぷりとその庇護の下にいるにも関わらず、幻の親への関心や想いがめぐります。肯定的なことばかりではなく否定的なことも思っているようです。中学3年生の男児でちょっとした事件を起こし鑑別所に入っていた養子は、「僕は実親から棄てられたんだ。こんなことをしていたら今の親からも棄てられるかもしれない…」と友人に話していたと、養親の相談の中で聞きました。棄てられるか

\* 「気になる子 理解できる ケアできる」 ヘネシー・澄子著 学習研究社2006年発行より引用

もしないと言っている割には、行動を改めるわけではありませんし、遠慮があるわけでもありません。彼らの複雑な心の状態に気をつけてやることは大事なことです。これまで育ててきた親としての自信をしっかりと、「私たちはおまえの親だから、こんなことをすれば叱るし、できないことはできないと言うしかない。しかし決して親としての愛情や責任を放棄はしないのだよ」と、大きな声で言ってやればよいと思います。

かつて、「僕の本当の母親はおまえみたいなブスと違う！」と口うるさい養母に言った中学生がいました。養母が泣きながら「憎たらしいでしょ！」と訴えていました。しかし、彼が20歳を越えた頃、そのことを彼に訊いてみたところ「僕…そんな失礼なことを申し上げましたでしょうか？」と答えていましたから、この頃の発言は記憶にさえ残らない程度のことなのだと思います。これは、すでに真実と事実を知らされているからこそ、そして少々何を言っても、今の関係が崩れるものではないという親への信頼があればこそ、できることだからです。

他方、子の出自に関する秘密を保持し、子どもに悟られまいとする親の努力がかえって子どもに不信感をもたせているかもしれないのに、親がこれに目を背けてきたため、すでに何らかの疑いをもってしまった子どもや、ずっとこの家には何か秘密があるのではないかと感じている子どもたちにとっては、この時期はとても苦しい状態になっているかもしれません。

養子のH男は、2歳で引き取られたのですが、すでに6歳前後で、もらわれてきた子どもではないかと疑っていました。理由も実に単純なもので、「友達の親に比べて僕の親は歳をとっているし、友達の親と比べて甘すぎる」ということでした。それで何気なくそのことを母親に話したときの母親の瞬硬直し戸惑った表情から「僕はもらわれてきた子どもなんだ。だけどこれを決して親にも言ってはいけないのだ」と悟ったというのです。そのタブーをもってしまった子どもの苦しさは、成長するほどに大きく重たくなりました。自分は何者なのかと悩み、将来の生き方さえ模索できず、高校生になったときには、勉強する意欲もなくなり、不登校になってしまいました。そんな自分にまるで腫れ物に触るようにおろおろしている親を見ているのもつらくなって、人との接触が多くない深夜のコンビニでバイトをして貯めたお金を持って、家出をしました。でも夜ホテルに落ち着くと、置手紙もしてこなかったことに気づいて、親に「もうその家には帰らないけれど、心配しないでほしい」と電話をいれたのです。電話にでた養父は「今から迎えに行く。そこで待っていてくれ」というと、一晩中高速をとばして彼を迎えに行き、その帰り道にすべてを説明してやりました。

この時期に告知するならば、慎重にしなければなりません。この年齢になれば出自を理解する能力は確かに備わっていますが、既述したようなこの時期特有の状況によって、精神面ではまだまだもろいものをもってきます。しかし、疑いをもって悩んでいる子どもの

リスクと事実を知ってのリスクとを天秤にかけてみなければなりません。

親自体が、これ以上秘密を抱えていることに我慢ができなくなっていることもあるかもしれません。ともかく今話したいと思う理由と、今まで話さなかった理由は何なのかをしっかりと考えてみましょう。ずっと秘密にしておくことが良いと信じてきたことが揺らいでいる原因が、出生にかかわる事柄以外の問題で、すでに親子関係が危機にさらされているというのであれば（実は親子関係がうまくいっていないときほど、親は親子間の秘密をばらしたくなるものなのです）、そして子どもには「出自を知る権利」があると思えるのなら、あるいは実際に子どもが明らかに疑いをもっていることが危惧されたり、誰か第三者の口からもれる可能性があったり、遺伝的なつながりのないことを伝えるしかない事態が起きているのなら、この時期でも告知をしたほうが良いと思います。大人になってからにしても、告知によるショックが和らぐというものではないのです。その代わりに、子どもとの関係が少しでも安定していて、受験だとか、失恋などで悩んでいたたりしていないときを選んで、そして告知後の子どもの疑問にしっかり答えられる時間的余裕をもって、また子どものうろたえにしっかり寄り添える覚悟と準備をして、できるだけいつもの暮らしの生活空間で話すことが大切です。

イギリスの本にはこんな話し方が紹介されています。

「私と母さんは、君に伝えたいことがあるんだよ。それは、私たち家族に君が誕生したときのことなんだ。私と母さんはずっと子どもがほしいと思ってきたんだ。でも私の精子では子どもが授かることが無理だということが判ったんだ。そしたら病院がドナーの精子を使ってみてはどうかと勧めてくれたんだよ。—それが誰だか私達にはわからないんだ—君を授かるために助けてくれたんだよ。母さんが妊娠したと判ったときは信じられないぐらい嬉しかったよ。私たちはなんてラッキーなんだと思った。君が生まれたとき、私たちは天にも昇るほどに幸せだった。君をととても愛した。それ以来ずっと愛してきたんだ。

このことは君にとって少しショックなことだと思うけれど、でもこれ以上大きくなる前に君にちゃんと知っておいてもらった方がいいと思ったんだ。」

..... 成人 .....

実は、成人した子どもへの告知の例文では、上記の例文の下線の部分が次のような言い方になっています。

「このことは君にとって少しショックなことだと想像できるし、もっと前に君に話さなかったことを申し訳なく思っている。私たちが病院に通っていた時代には、医師たちは子どもがそんなことを知る必要はないと思っていたんだ。でも時代とともに考え方が変わって

きたんだ。君が成長途上の時期では話すことがよいという時代ではなかったんだ、けれど今は、私たちが君にはこのことを知る権利があると思っているんだ」になっています。

高校生ぐらいなら、この例文の方が子どもには理解されやすいかもしれません。

どの年齢で告知するにしても、例えば成人であれ小学生であれ、告知の始まりは、子どもを産みだした事、そのために医師の勧めたドナーからの提供を受けたこと、それで妊娠できたときにはとても幸運だと思ったこと、赤ちゃんが生まれたときには天にも昇るほど嬉しかったことを話すということに変わりはありません。年齢が小さいほど、その話に目を輝かせて聞いてくれるでしょう。また生まれたときの状況や、両親や家族の喜び方の逸話を繰り返し繰り返し聞きたがったりするでしょう。「ねえねえ、もういちどききたいな わたしがうまれたよのこと」\*というアメリカの絵本があります。養子として迎えることになっていた赤ちゃんが生まれたという電話を夜中に受けた養親となる夫妻が、驚いてあたふたと準備し、空港から病院に駆けつけ、家に連れて帰り、家族になる間の出来事を、何度も何度も聞きたがる子どものお話です。翻訳本も出版されています。こんな絵本なら養子だけではなく、また大人も楽しめます。

しかし、大人になればなるほど、告知のショックが大きいのです。隠されていたことへの怒りや、そのことで基本的な親への信頼が足元から崩れていく喪失感は、想像以上で当人にしか解らないことでしょう。

そのためには、告知後のフォローが大切です。

まず、真実がしっかり伝えられていたとしても、第三者の精子や卵子や胚によって、自分の命が成り立っているという事実を受け止めるには時間がかかります。伝える親のほうにもつらかった何十年間の複雑な思いがありますから、お互いに神経過敏になるでしょう。まず、このことについては、いつでもお互いに都合の付く限り何度でも話し合うつもりがあることを伝えてください。

特に、AIDの場合には、父親にとっては、遺伝的なつながりがないことを明確にしたことによって、男性不妊だと診断されたときに感じた喪失感を再現させてしまうかもしれません。「特に典型的な男性は、彼らの感情を簡単に話すことはあまりなく、不妊症であったことや精子・卵子・胚の提供による治療という痛みを伴う事例の場合については、助けを求めるときをしません。彼らがそれを長い間隠していた場合なら特にそうです」とイギリス人の場合にも書いてありますから、日本人の男性ならなおさらのように思います。しかし、逃げないで子どもと向き合ってほしいと思います。あなたの愛情が子どもに届いているかどうかを確認する必要があります。「今更そんな照れくさいことなど言えるか!」などと

\* ジェイミー・カーティス：作 ローラ・コーネル：絵 坂上 香：訳 偕成社 1998年

思うかもしれませんが、イギリス人のように「愛している」という言い方はできなくても、「おまえが私の息子（娘）であることをずっと誇りに思ってきた」程度のことは、言っていたきたいように思います。

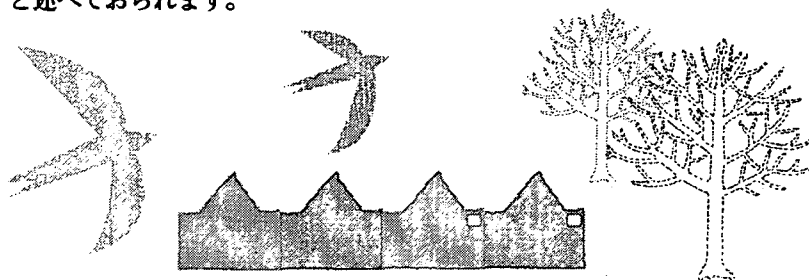
日下和代氏が、日本のAIDで生まれた当事者へのインタビュー調査を行い、「AIDで生まれた子どもの心理」\*で、次のように分析しています（調査対象は、調査時点では全員20・30歳代で、事実を知ったときの年齢と性別は29歳時の男性・23歳時の女性・32歳時の女性・5歳時の女性・20歳時の女性です）。

まず否定的な感情としては、“AIDで生まれていたという：驚き・困惑・混乱”、“今まで隠されてきたことへの：怒り・裏切られた感じ・恨み・疑い・不信・悔しさ・苛立ち”、“自分のルーツの半分が分からない：不安・寂しさ・悲しさ・喪失感・孤独感”、“自分が存在してもよいのか：自責感・嫌悪感・辛さ”などが聞き取れ、肯定的感情としては、“事実を知らされてよかった：安心感・解放感・安堵感”、“告知後のこじれた関係の修復による：ワクワクする・満たされる”、“父を理解したい気持ちの芽生え・母に愛されている：幸福感”などであったそうです。

父親への感情の変化をみると知らされる前より、「オープンになったので、話しやすくなった」「もっと早く知っていたら良い関係が作れた」「愛情を感じられなかったが理解してあげればよかった」「もともと関係が良かったので、変わらない」「より関係が希薄になった」「肩の荷が下りた」など色々ですが、告知前に父親との関係がよくなかった人は、父親への感情が好転していたと言います。

事実を知ってよかったかどうかという質問に対しては、全員が良かったと答えています。「もっと早く知りたかった」、「大人になって知る方が、ショックや哀しみが大きい」などの発言があり、調査対象者全員が早期の告知を望んでいました。

興味深いのは、両親の「告知するべき」との考えによって5歳で告知された人は、驚きやショックなどの否定的な感情を感じることなくその事実を自然に受け入れており、その後の親子関係も親密で良好に経過したとのことでした。日下氏らも、「両親によって幼い時期に事実を知らせることが必要であり、それによって親子の信頼関係を築くことが重要である」と述べておられます。



\* 日下和代「非配偶者間人工授精（AID）で生まれた子どもの心理」前掲脚注7頁「AID当事者の語りからみる配偶子・胚提供が性・生殖・家族感に及ぼす影響」のP58～62を筆者要約

## 6. ドナーが誰であるか判っている場合の告知

「はじめに」で紹介したように、厚生科学審議会生殖補助医療部会の「精子・卵子・胚の提供による生殖補助医療制度の整備に関する報告書」では、生まれた子どもが提供者を特定できる情報を知ることを請求することが認められていますが、提供を受ける夫婦には誰の精子・卵子・胚であるかについては匿名にされています。そして当分の間、兄弟姉妹等からの提供は認められないことになっています。しかし、今は生殖補助医療を規制する法律がないために、実際には特に親族による提供治療が行なわれているという事実が、すでに一部では報道されていることから相当数の出産事例があるだろうと予測されますので、ドナーが親族である場合や、知人である場合に、告知はどうあれば良いかについても記述しておきたいと思います。ただし、実際の事例を残念ながら知りませんので、「Telling and Talking」から、その考え方や事例の部分を要約して紹介することにします。

### ..... 関係者(家族の場合は家族全員)がカウンセリングを受ける .....

ドナーが誰であるかを知っている場合というのは、身元を特定できることに同意をしているドナーとは基本的に異なります。受療夫婦はすでにドナーが誰であるかを知っている、あるいは何らかの人間関係があるということになります。そのドナーはおそらく家族の誰か、友人、知人であるでしょう。あるいは誰かから紹介された、場合によってネット上などで募集したという場合もあるかもしれません。

従ってそういうドナーを利用することを選んだ家族にとっては、そうしなければならないそれぞれの事情や状況があると思います。この冊子では、子どもに「自分の始まり」について告知することが目的であって、子どもの誕生以前の「親たちとドナーたちが行なった選択」について解説することが目的ではありません。しかし、そういう選択をするために行なった決定のいくつかは、子どもがその受胎についてどのように告知され、それに子どもがどう反応するのかということに少なからず影響することでしょう。すなわち、ドナーと子どもとの関係の本質について、関わるすべての人たちにはっきりと理解されていなければ、問題が起きる可能性があります。例えば、姉(妹)が妹(姉)に卵子を提供した場合、子どもを産んだ人が最初から母親であるということをはっきりさせておくことが重要なことです。卵子を提供した姉(妹)は“特別なおばさん”になるのであって、治療前のカウンセリングによって、彼女がおばさんであり続けられることと、彼女にいかなる理由があろうと、生まれてきた子どもの母親としては認識される必要がないということがはっきりとさせられることが重要です。

家族内での提供は、提供を受ける不妊家族にとって共通の遺伝的背景を有する子どもが



もてるという意味では、もっとも満足できる方法です。しかし、提供により家族概念の曖昧さ、あるいは競争意識がかき立てられる、あるいは悪化する可能性があるため、治療が始まる前に、すべての家族メンバーに対してのカウンセリングが絶対に必要です。また、年月の経過とともに、予期せぬ感情が起きることも珍しいことではないのです。

家族の中での役割と責任が明確でない場合や、あなたやあなたの提供者がお互いに対して抱いている気持ちに問題がある場合、または、提供に関する事柄に何らかの問題を感じている場合、関係者全員のために支援やカウンセリングを受けることが極めて重要です。

#### ..... 提供者をよく知っている場合 .....

友人や知人による提供は、素晴らしい祝福にもなるし、悪夢にもなりうるのです。それは、関係する人たちの理解と、そして短期や長期にわたる問題、それも感情的かつ現実的な問題を、カウンセラーの援助を得ながら、よろこんで一緒に解決していこうとする姿勢にすべてかかってきます。

どんな場合であっても、知っているドナーの助けで生まれてきた子どもたちに、それをオープンにすることは、子どもの利益になるばかりではなく、関わりあったすべての大人の意思決定を強めることとなります。何があったのかについて正直であることは、誰かが意図的にあるいは駆け引きの手段として利用する秘密がないということです。

まだ幼いこの子どもたちに最初に告知をする方法は、匿名のドナーで生まれた子どもの場合と同じです。大事な問題は、子どもにドナーが誰であるかをいつ知らせるのかということです。

DCネットワークの参加者で、ドナーが誰であるかを知っている家族は、まず誰がドナーだと特定せずに、提供による生殖補助医療によって生まれたという一般的な事実を早い年齢（3歳～5歳）に話すことにしています。それから数年経過して、子どもが提供に誰かが関わっていることを理解するようになったときに、親はドナーが誰かを明らかにしています。その時期は、子どもたちが8歳～10歳の間で、第三者の提供による治療について子どもたちから質問が出るようになったときのようなようです。

思春期が始まるまでの方が、子どもはドナーについての情報を容易に受け入れやすいようです。

「私達が赤ちゃんをもつためには誰かの助けが必要だと判って、お母さんとしてはできるだけ身近な人がいいと思ったので、アニーおばさんに頼んでみたの。そしたら「いいわよ」って言ってくれて、あなたのドナーになってくれたんだよ」

「私たちは、あなたの誕生を手助けてくれた人について、あなたが知る事ができるよ

うにしておきたかったんだ。だから慎重に選んだんだよ。覚えているかい、去年犬のサリーと一緒に我が家に滞在したジョンを。実はあなたを産むために私たちを助けてくれたのは、あの人のよ。」

どんなにあなたがドナーに感謝していても、子どもがその人をどんな人だと思うのかについては彼らの自由であるべきです。ですから、ドナーのことを“素晴らしい、思いやりがある、寛容だ”という表現を簡単に使うことには慎重でなければなりません。

もしドナーが、家族の一員か定期的に家に遊びに来るような人であれば、子どもはその人について何らかの感情をすでに抱いているはずです。子どもには、新たにもたらされた情報に対処するのに時間が必要ですし、また自然には生じない関係を作ろうとして子どもがプレッシャーを感じることがないようにすることも、重要です。

初めての告知であっても、すでに告知しておりその後続ける会話であっても、もしあなたが身元がわかっているドナーの精子を用いたのなら、子どもにはその男性と母親とがセックスをしたのではないということをはっきりさせておくことは重要です。8歳～10歳ぐらいの子どもには、人工授精がどんなふうに行なわれるのかに好奇心があるかもしれませんし、そうでないのかもしれないのですが、もし質問してくればそのプロセスを率直にかつ事実に基づいて説明できるようにしておくべきです。ただ、それに伴う行動については恥ずかしい気持ちや複雑な感情をもっているかもしれません。卵子提供については、まだ性的な含みの障害を受けずに、そのプロセスに興味を示せるかもしれません。どちらにしても、そういう子どもの感情を無視しないことです。片方の親とは遺伝的なつながりがなく、別の人物とはつながりがあると初めて告知をされた子どもは、順応するのに時間が必要なのです。

ドナーが誰であるかが判っている場合、その子どもがその人とどのような関係やコンタクトをとりたいのか自分自身で決定できる年齢になるまでは、親はその人との関係を良好に（必要以上に親しくということではなく）もちたいと考えるでしょう。すべての人間関係と同じく、信頼が家族とドナーとの間で継続されるための鍵となるのは、尊敬、誠実さ、自発性、そして客観的な視点から場面を見る能力です。もし関係している大人たちが、このように責任ある行動が必要な場面で取ることができるなら、子どもには大きな利益をもたらすことでしょう。

## 7. きょうだいについて

きょうだいがいるということには、それぞれの子どものにとって利益と不利益があります。きょうだいは基本的には親の愛情をめぐる競争相手になりますし、子どもは親から自

分だけがより多く愛されたいと思うものです。しかし、そういう葛藤を経験して、人間として成長するということも言えるのでしょう。特に、成人してしまうと、きょうだいがいることをありがたいと思うことが多くあるように思います。また、同じ境遇の子どもにとっては、一人で少数派を生きるよりも仲間がいる方が、少しは楽かもしれません。

#### ..... 背景の異なる子どもへの配慮 .....

養子でもそうですが、この場合のきょうだいは、全く遺伝子がちがうことがあるわけですから、例えば上の子どもより下の子どもの身体の方が大きくなったとか、能力や気質の違いを含めて、そういうことがきょうだいの葛藤を大きくする場合もあります。まず親に、それぞれの子どもの違いを楽しめる余裕がないと、子どもを育てる苦勞は、倍数ではなくて二乗倍になるものです。

ただ、実子に加えて養子を育てるとか、養子をもった後で実子が生まれたりする（時折あります）ことは、かなり複雑な親子・きょうだい関係を作ることになることも、事実です。

提供による生殖補助医療で生まれる場合にも、同じドナーの精子（卵子）で生まれた場合（多胎児を含めて）と、そうでない場合によって、色々と葛藤や軋轢を生む可能性があります。また、きょうだいの年齢差によっても受けとめ方が違うでしょう。

時には、援助の要らない方法で生まれた子ども、生殖補助医療で生まれた子ども、加えて提供による生殖補助医療で生まれた子どもという、それぞれ生まれてきた背景の異なった子どもを一緒に育てる場合もあるかもしれません。ドナーが明確な子どもとどうしてもドナーがわからない子どもを一緒に育てる場合もあるかも知れません。そのことによる微妙な影響を、それぞれの子どもに与える可能性があります。

#### ..... 告知について .....

告知については、基本的に望ましいことはどの場合も変わりません。養子の場合には二人目を引き取ってもらう前に、今いる子どもにまず「養子である」という告知を必ず済ませてもらうことにしています。同じ立場であるというところから二人の関係が出発できるようにと考えています。

実子がいる場合にも、必要な情報を同じく家族全体で共有することは大事なことです。情報の与え方には配慮が必要かもしれません。

「子どもにわざと違いを作ろうとしたわけではないが、物事というのはこのようになって

しまうことがあるのだということを話します。親が真剣にそう考えていれば、子どもも自分たちの違いは人間みな誰もが違うことの一つにすぎないと、受け入れるでしょう。しかし、子どもがそれでも納得しない場合には、子どもの気持ちをよく聞き、その気持ちを認めてやるのが最善の対応です。きょうだいにはそれぞれのニーズがあるため扱われ方に違いがあっても、自分たちはみな平等に愛されているのだということを再確認させてやることです。

親は、子どもが望むもののすべてを与えてやれないことに対して、申し訳ないという気持ちを抱きやすいものです。しかし、自分を責めることはありません。子どもに対していつも正直であること、話をよく聞き、気持ち受けとめ、理解してやること、そして子どもたちが必要とするときに彼らのそばにいてやることによって、子どもたちが自分の人生にふりかかってくる事柄に立ち向うための道具（柔軟性・自尊心・自信のある自己）が可能限り身に付くように援助することです。」

一般的には、提供によって生まれた子どもの場合には、その子どもが生まれてくるまでの治療期間が長くかかっていることが予測され、一人っ子であることが多いと思います。特にその場合には、同一ドナーによる半分遺伝的つながりを分け合っている可能性のある別の家庭で生まれ育てられているきょうだい（答申では1人のドナーの提供精子から10人までの出産が認められています）に、関心をもつ場合もあるでしょう。ことさらに親からそういう情報を知らせることが必要かどうかは難しい問題ですが、外国では、すでにAIDで生まれた子どもたちがドナーを捜す経過の中で知り合った者同士で、ドナーを共有するきょうだいではないかと期待してDNA鑑定をしているという情報をTVなどで見聞きすると、日本でも同じことが想定され、きょうだいというか、立場を同じくする者としての連帯感をもちたがるかもしれません。

## 8. 学校や性教育との関わりについて

イギリスの本には、「初等教育の終わりにかけて行なわれる性教育が始まると、どんなことがカリキュラムにあるかをきちんとチェックしておくことは、親にとって役立ちます。もし、精子・卵子・胚の提供による生殖補助医療が家族をスタートさせる多くの方法の1つであると説明されていなければ、こうした点を加えるように頼むために関係のある教師のところに行くことは、提供を受けて生まれた子どもの存在が普通のことであるとするのに役に立つでしょう。DCネットワークのメンバーは、ほとんどの教師がこうした方法で子どもをサポートすることについて、大変オープンだと考えています。今日、多くの教師にと

